

New Lifestyles and New Housing Trends

特集 新しい居住スタイル

●
今求められる新しい居住スタイルとは

自分のライフスタイルをしかる 服部 岑生

対談 都市に住まう文化とこれからの行方

谷 直樹 × 弘本 由香里

自分のライフスタイルをしかる

服部 岑生 *Written by Mineki Hattori*

ライフスタイルの変遷

Ⅱ 向上型ライフスタイル

住宅の企画や計画の仕事を長年してきたが、右肩上がりの経済成長期であったマンションブーム、プレハブ住宅の普及や超高層住宅の建設ラッシュ、その反対の景気後退のオイルショックや、右肩上がり後のバブル崩壊の経験を振り返ると、理想とされるライフスタイルのイメージが、その時代の明るさや暗さをよく反映していることに気が付く。

二〇世紀後半、日本の戦争後の復活の時期は、近代化の夢がありながら伝統的な生活感が維持され、人格主義や倫理主義を前提に、勤勉な生活の価値観が基本となつた。その後経済が安定し、明るくて未来を楽観的に予想する時期では、夢でしかなかった豊かな住まいとか海外旅行の欲求が盛り上がる。未来が暗く右肩が下がっていく時代では、成長していく要素は少なく我慢や禁欲的なイメージとなる。

とりあえずここで、ライフスタイルの流れを、戦争後の生活向上の意欲に満ちた「向上型ライフスタイル」から、現在比較的重視されてきた地球に優しい生き方やエネルギーを大切にする資源を守るうとする生き方など「環境型ライフスタイル」へと名付けておきたい。

戦後の規律正しい住宅の配置、狭いが喜びのあった2DKの住まいなどは、まじめな労働と子女の教育によって明るい未来が生まれるという家族の希望のイメージが前提のライフスタイルに対応していた。映画「三丁目の夕日」を見た方は、そのシーンに思わず感動の涙を流されたのではないだろうか。生活とその希望、それを支えた衣食住のあり方は、現代の私たちにとって理想的な相互関係を持っていた。

今求められる新しい居住スタイルとは

しかし、その後のより経済が発展する段階になると、勤勉は過労となり、父親は家庭から離れ、理想の希望が実現されていくわけではないことに、少しずつ気が付くようになる。その頃で思い出すのは、『もっと子育てをしかりやる』というスローガンのライフスタイルである。有名なタレントの子育てには、やさしさだけでなく厳しさが大切という主張だとか、子供に個室を与えるのではなく、ドアは開放的にして親の監視ができるようにするとか、生活の仕方から住まいのデザインまで幅広く、いい日本人になるよう、よい子供を育てよう、という潮流があった。

その後、経済発展、個人の欲求実現や男女の社会参加がより進むと、問題はより深刻になっていく。鍵っ子や不登校児、家庭崩壊というような問題、地域社会の崩壊、社会犯罪の深刻化などが一般化し、生活の仕方や住まいの作り方の問題、すなわち個人の生活の仕方＝ライフスタイルだけでは対策が立たない時代に入っていく。公害の問題が顕在化するのもこの時期である。家庭や生活の規律を正すという段階から、社会、地域や家庭の病的な問題を治療する必要がある時代である。しかし、科学技術は飛躍的に発展し、車、テレビ、コンピューターの普及がめざましく、生活は伝統的な方法を維持できなくなっていく。人間は、科学技術と発展した経済によって多様な欲望を抱くようになり、その実現という激しい欲求を持つようになる。

スローライフという根本原理

＝環境型ライフスタイル

現代は、治療を要する社会病理に悩みながらも、蓄積してきた豊かさで、やみくもに欲望を実現する社会であった。ここしばらく暗いハッブル経済崩壊の時期になり、右肩下がり豊か

さと地球環境とエネルギーの問題にうちひしがれ、環境に優しく経済のドライブを制御して、スローに生きるスローライフ、あるいはLOHASな生活が、地球人の生き方として唱道されている。

どの時代にも、自然を愛し、人間の作為のある人工を嫌うライフスタイルがある。時代が変化することすら嫌う保守主義に繋がっている。人間が生物としてどこから発生したのか分からないが、陸生とか水生とかも分からないが、その意識も不透明な時代から現代の人類に進歩したことは、私たちの生物体に対する神の意志である。その進化まで否定する人もいる。私はそういう狂信的な人間は嫌いだ、それを持ち上げるような、自然のままがよいという人たちがいる時代である。地球の緑や水や空気が汚染され、生物は死滅するという科学的な予言をライフスタイルで阻止しようというのである。グリーンピースの捕鯨阻止、森林伐採阻止などにどこかで通じているが、アルカイダの主張する「アメリカ的現代」への原理的な反対は、はじめはラディカルにみえた。しかし景気が後退し、暗い未来予想が人々の心に浸透すると、一般的なライフスタイルとして、スローライフあるいはLOHAS＝環境型ライフスタイルとして、少なからぬ人々の信条になってきた。

しかし、私たちはどこまで総合的に自身を律しているのだろうか。スローといえながら、車のスピード狂であるなどはざらなことだし、個人の微細なライフスタイルの側面でNIMBY（Not In My Back Yard）であることが多い。

車とLOHASの関係は、基本的に対立している。しかし、人は郊外に自然の生活を求めながら、快適なドライブでそこにアクセスしたがる。都合よく、正面の顔は環境を愛している顔で、後の顔は夜叉で環境を食っていく顔である。この都合型ライフスタイルである。

（NIMBYとは「not in my backyard」の略で、環境を守る行動や計画に賛成するが自分の住まいの庭にその計画が及びると反対する人のこと。

原油高騰が車社会を直撃

風見鶏型ライフスタイル

アメリカ・ワシントンの地下鉄・鉄道を運営する公共交通機関メトロールでは、本年四月から乗客が目立って増えている。延べ客数は、四月二〇日と一八日にそれぞれ過去六位と九位を記録。これまでの上位記録は、大統領就任式や「桜祭り」など行事の日だが、最近は普通の日が目立つ。「車から電車に乗り換えて通勤する人が増えているようだ」(広報)。この報道は、この冬季の異常寒波によって原油の過剰消費が起って価格高騰を招いたとか、世界、特に中国のエネルギー利用が急増し、今後とも同様な事態が続くともいわれているが、車のガソリン費用が高騰し、その利用が抑えられたことを示している。人々の経済に反応する行動が、車を利用する、あるいはエネルギー消費を抑えるという関係である。収入が減少しても同様な反応が起こる。ライフスタイルは、今や経済状況に敏感に反応せざるを得ないという意味で風見鶏型ライフスタイルの時代に入ったといえる。

私たちの生活は、広く地球規模の経済現象に支配されており、もはや、ライフスタイルに対して人間の自立的な選択は、頭の中では可能かもしれないが、事実上は不可能である。

経済改革のまったただ中の日本では、「下流社会」というゆゆしきユアンスの社会下層が存在感を大きくしているという。景気が回復基調にあるといわれながら、国際経済の動向は安定しないし、国民の一部は貧困な経済状態にあえいでいるという。

ライフスタイルは、誰のためのスローガンなのだろうか。登りゆく希望の時代では、下流はいつか中流に到達できる階層であったから、下流を無視したライフスタイル論に誰でもがかなえら

れる夢を見ていた。高級な輸入車を楽しむスタイルが宣伝されても、自分がいつか実現できる可能性があるとして夢をふくらませたし、あるいは自分の夢と違うことを確認しながら、しかしよくない夢だとは決めつけなかった。この時代は、今や夢がもてる勝ち組と、破れた負け組に別れてしまったのだろうか。あるいはまた、仮に今勝っていても、夢やぶれていく不安定な時代であるのか。軽蔑されてしまったホリエモンの夢は、そうした現実のものである。

行き止まっている

ライフスタイルの個性化

住まいのインテリアは、私たちの生活に対する個人的で、また感覚的な好みを実現するものである。人生観のようなライフスタイルもあるが、住まいなどデザインの分野では、インテリアの指向性がデザインを決めていくのに有効なのでよく使われるし、よく研究されてきた。先に書いたライフスタイルのおおよその傾向は、生活の上で最も大切にしている価値に焦点をあてて考えてみたが、インテリアの好みも、上昇指向の時代、環境を大切にしている現代、さらに経済状況などに合わせて、風見鶏のように変化させる現代のように変化している。

二〇五〇年の時代では、おおむね伝統の貧しい和風のインテリアを脱出し、欧米風で近代的なインテリアを求めてきたわけだが、現在は、これまでの一本道をたどってきたインテリアのスタイルが、個人の選択によって広範囲に多様化している。その中で目立った傾向が二つある。

和風の好みに繋がる、畳に座って生活し、障子・ふすまの建具の開閉で部屋をその都度、目的や気候条件に合わせて使う生

活スタイルは、椅子の腰掛け、板の間で生活し、ドアとエアコンで部屋を閉じて使う生活スタイルに変わってきた。この一本道の变化は、経済的なゆとりとともに、電化製品の発展やテレビの完全普及のような技術にも支えられてきた。しかしそれ以上の変化となると、インテリアデザインの洗練された過去の様式、あるいはモダンな常に革新していく傾向を私たち自身が苦心して選択、あるいは創造しながら進んでいく道であった。生活に關わるライフスタイルは、欧米などのある意味で完成されたスタイルを輸入する段階から創造する段階に入っていた。

マンションやハウスメーカーのカタログには、一本道以降の多様なデザインの提案がされている。しかしよく見ると、少しの和室があるが、基本はモダンな洋風を、ベージュ色や木調の家具であしらったデザインで、もう行き止まっているかのようだ。確かにインド風とかスペイン風とか、希少な異国風のインテリアも提案されるが、マイナーな存在である。

現代のインテリアにみられるライフスタイルの状態は、ある意味で一定になってきた。より詳細な部分で、例えば、色合いや材質感で変化する特徴はあるが、それ以上のものではない。

インテリアのデザインは、確かに住む人の感性を示すものであるが、その平面計画(間取り)はどうなっているだろうか。先頃、私はこれまで研究してきた間取りの情報を集めて、『間取りの世界地図』(青春出版)という本を出版した。新書版で分かりやすく書いた本なので、多くの方から反応をいただいたが、その中に、世界の間取りは本に書いてあるように、それほど違いがあるのでしょうかという質問があった。

実は、本の中では欧米を中心に扱っているが、それぞれの国の住宅カタログや、よい間取りの見つけ方などの参考資料から間取りを取り上げて解説したものである。日本人は、各国の間取りには典型的な間取りがあるように思いがちである。特にヨーロッパでは、中世からの住まいの間取りから新築の庶民向けのもの、超高級な豪邸まであって、平均的な間取りはない。そこで

の本では、庶民の今手に入る住まいの間取りを中心に地図を作ったのであるが、その庶民の間取りは個性化しているかどうかということが問題になる。日本も欧米のライフスタイルを移入して現代の生活を作ってきたように、欧米各国も同様に、互いに住宅とその生活を移入しあってきたし、欧米人同士の行き来は頻繁であるので、国際的に、生活とそれを支える住まいは共通性を持ってきたといえよう。これはよくいう世界経済のグローバル化の一現象でもある。しかし欧米では、日本と異なり、地域ごとの住民自治が発展しており、都市から環境までの計画には、地域住民の意見とそれを実行する地域行政のロカライゼーションの思想が浸透している。このために、地域ごとの制度によって住まいの間取りが特色を持つようになる。もちろん住まいの設計者が提案するデザインだけでなく、間取りの工夫があるが、それ以前に、地域の特色をもつ間取りが生み出される。例えば、パリの公共的な補助のある住宅では、間取りに夜と昼の領域を区切るドアが付けられている。喧嘩な都市の住まいの条件として工夫された特色である。しかし、日本では、このような間取りの工夫は一般的ではなく、生活に直結する特色は、あまり目立っていない。

生活のスタイルが世界中で共通になると、必然的に、この地域の間取りも同じになる。現代は、そういう傾向がはつきりしてきた時代である。

以上のインテリアに現れるライフスタイルの特色は、もう一つ、欧米にはない日本特有の傾向を隠している。マンション居住者が多数を占めるようになり、家族の間で好み分散し自由になってきたことから、住まいの外観と無関係にインテリアの好みが表示されている。大きなインテリアの文化を創造するような傾向ではないが、家族のメンバー間で生活用品などのインテリア小物やカーテン、家具などの趣味がバラバラになってきている。共通化という大きな流れがあり、その細部で小さな個性化が競われているのが現代だ。

ベルリンの住宅地
ゆったりとした中庭で自然と
共生する集合住宅



エコロニアの風景(松田安代撮影)
オランダの環境共生実験住宅地。
建物の作り方、自然との共生、コ
ミュニティの生活の仕方などすべての
実験が行われている

一九四五年の第二次世界大戦終了後、生活水準の向上を求めて私たちは、向上型ライフスタイルの人であったが、高度経済成長を成し遂げた段階で、一本道の向上から個性化の道に向かったはずであった。しかし個性化は強い与党と群小の野党の關係のように、共通のスタイルを超える強いスタイルを生んではいないようだ。

これから将来に向かって、本質的に新しく共通性を越えたオリジナルなインテリアが生み出せるだろうか。近代化して生活上を前提にした向上型ライフスタイルのインテリア、その後の環境を意識するライフスタイル、経済変動などに風見鶏的に揺れるライフスタイルのいずれにおいても、個性化の原点になるは

ずの間取りやインテリアデザインのスタイルは、似たもの同士で革新的ではない。

そうすると、これまでの何か自立性を失ったライフスタイルを脱却しないと、独自のライフスタイルが生み出されないとということに気がつく。

ベッドルーム・コミュニティと
ニューアーバニズム

社会派ライフスタイル

すばらしい住まいの夢を見て、それを家族の理想として実現しようという時に、その人がまとつ服というかファッションがライフスタイルだとすると、その意識に含まれない条件である景気や経済状態が人間の感覚を支配する時代では、自立したライフスタイルといっても、情けないほど不安定で風見鶏にならざるを得ない。

今年四月一四日のアメリカの新聞ワシントンポスト(ネット http://www.washingtonpost.com/wp-srv/opinions/cartoonsandvideos/toles_main.html?name=Toles&date=04142006)に「アメリカ人のライフスタイルを風刺した漫画が載った。住まいや生活に関する欲求をすべて実現したが、家が大きくなって暖房費がかさむ、職場との通勤が遠すぎるし、車は自分が乗るには大きすぎ、その上ガソリン代が値上がりするし、さらにテロリストの脅威にさらされて、何もよいことのないという嘆きの風刺である。最後のコマでは、私のライフスタイルを攻撃しようとしているやつがいるとつぶやいている。日本人の現在も少しずつ似てきている。欲望の実現という夢に向かったライフスタイルが辿り着く皮肉である。」

Remembering Jane Jacobs (1916 - 2006)



Jane Jacobs
(Source: Wikipedia)

"Great cities are not like towns, only larger. They are not like suburbs, only denser. They differ from towns and suburbs in basic ways, and one of them is that cities are, by definition, full of strangers."

"It may be that we have become so feckless as a people that we no longer care how things do work, but only what kind of quick, easy outer impression they give. If so, there is little hope for our cities or probably for much else in our society. But I do not think this is so."

--Jane Jacobs, *The Death And Life of Great American Cities* (1961)

Jane Jacobs (May 4, 1916 -- April 25, 2006) was an American-born Canadian writer and activist. She is best known for *The Death and Life of Great American Cities*, a powerful critique of the urban renewal policies of the 1950s in the United States. The book has been credited with reaching beyond planning issues to influence the spirit of the times. "Jacobs came down firmly on the side of spontaneous inventiveness of individuals, as against abstract plans imposed by governments and corporations," wrote Canadian critic Robert Fulford. "She was an unlikely intellectual warrior, a theorist who opposed most theories, a teacher with no teaching job and no university degree, a writer who wrote well but infrequently." Source: Wikipedia.

写真：Wikipedia インターネット上の書き加えに参加できる辞書から
記事：The Planning & Development Network 4月26日のニュース

私たちは、自分の住まいというねぐら(ベッドルーム・コミュニティ)をくりだすことができたが、本当に幸せがくるのだろうか。言い換えると、社会体制までも変化させていかなないと安定した理想が見いだせない。すくなくとも自分のベッド周りだけでなく、住処の周りである都市環境に対する自身の希望を持って、その実現を図らないといけない。
アメリカの、もう一つのライフスタイルの話題を紹介する。それ

はライフスタイルセンターという商業施設の流行である。ホームセンターは、日曜大工やDIY用品、材料の物販店だが、ライフスタイルセンターは、ライフスタイルを作る材料・道具の商店である。すなわち、今やライフスタイルは、人々が材料と道具を利用して構成するものであり、その作業が流行しているということである。

一本道の向上型ライフスタイルや景気が低迷し揺さぶりがなかった時期の環境型ライフスタイルは、大文字のライフスタイルである。国民が、意識も行動も共有する堂々としたライフスタイルだからである。それと併行して、個室のしつらえに代表されるインテリアデザインのライフスタイルに対する関心が生まれていくのである。アメリカのライフスタイルセンターは、小文字のライフスタイル文化がアメリカを覆っていることの象徴であり、これから日本にも上陸する、いやすでに上陸しているのかもしれない。

ベッドルームに潜り込むコミュニティは、しかし個々の人間の営みとしては、この時代のライフスタイルであるが、専門家たちはもう一度、大文字のライフスタイルを蘇らせようとしている。それがユアープラスムといわれる都市づくりの思想である。

創造と継承をたたかう

ライフスタイル

四月二十六日のビッグニュースは、アメリカの都市計画思想家ジェーン・ジェーコブスの死を報じた。ユアープラスムは、今新しい人間的な都市環境を再生しようとするスローガンで、都市内に多様な人間生活を混在させようとする方法を持っている。こ

の主張は今や死んでしまったジェーコブスの主張に繋がっている。

ジェーコブスは、既存の都市の人間生活は近代的な都市計画の方法では生み出せない人間的なよさを持っている、ニューヨークの下町のコミュニティは、その象徴であるとして、都市に関わる専門家の責任と、近代を超える価値観の重要性を主張した。近代主義は機能の混合を抑え、合理的に都市活動を分離し、人間が交流する、人間のための居住環境を破壊していると考えたのである。近代主義の象徴である格子状の道路と高層建築の都市ニューヨークに、しかしながらスラム地域に人間的な居住が継承されていることを訴えた。近代主義は都市の郊外にもはびこり、郊外のニュータウンはどんよりとしたタルな環境を生み出した。ここには、ベッドルームコミュニティがあり、人々の目はインテリアにのみ向いている。

環境型ライフスタイル 風見鶏型ライフスタイルの現状は、アメリカも日本も同じ状況である。人々は、自分のテリトリー、ねぐらに潜って外に出ない。そこが快適だからだし、外は楽しくないからである。ねぐらだけでなく、外のコミュニティを人々の場所にしないで、人間はねぐらのインテリア生物になってしまう。このような危機意識を専門家たちは再度声を大きくして訴えだした。

もっと外に、インテリアから街に向けて人々が、楽しみのため

に出て行く仕組みがあるまちづくり、それがニューアーバニズムの思想である。日本で、この現象は人ごとであろうか。住まいは閉鎖し、コミュニティへの回路は閉じてしまって、インターネットやメディアという抽象的な関係のみで外界と交信する人々のライフスタイルは、アメリカの反省の対象であるライフスタイルと同系統のものである。

現状の自分の内部に向かう指向性を反省し、外に向かう意識の切り替えが必要ではないか。自己を変化させて、もっともっと社会に出て行くようなスタイルが、来るべきライフスタイルではないかと思う。自分の内に内向して外を忘れていくスタイルには、もはや風見鶏型の生き方しかない。これからの人々には、自分をしっかりと持って自分をしかり、新しいスタイル^{CEL} 社会派のライフスタイルを創造することを期待したい。

服部 岑生(はっとり・みねき)

千葉大学名誉教授。一九四一年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院工学系研究科建築学専攻課程修了。専門分野は建築計画。専門領域は建築学の住宅・住宅地計画および施設マネージメント理論。主な著書は、『新建築学大系三三 建築計画』(彰国社)、『イギリスの集合住宅の二〇世紀』(鹿島出版会)、『間取りの世界地図』(青春出版)など。